

ありなしやま

蟻無山古墳群 測量調査 現地説明会

平成23年4月23日
赤穂市教育委員会

調査名：蟻無山古墳群測量調査
所在地：赤穂市有年原
調査期間：平成23年1月11日～平成23年3月31日
調査面積：7,890㎡

1 有年の遺跡

「文化財の宝庫」と言われる有年区域には、これまでの調査等によって縄文時代後期（約4,000年前）から、人々が生活していたことがわかっています。縄文時代後期の遺跡としては、馬路池遺跡、東有年・沖田遺跡、上菅生遺跡、有年原・クルミ遺跡があり、その後の縄文時代晩期（約3,000年前）には、東有年・沖田遺跡、有年原・クルミ遺跡で生活跡が見つかっています。しかしこれらの遺跡では、大きな集落を営んでいた様子はありません。当時の人々は、狩猟・漁労や、木の実などの収穫によって生活していたことから、食糧を求めて移住していたようです。

しかし、米作りが行われる弥生時代になると、人々の習慣が大きく変わり、ムラの営まれ方も変わります。人々は集落の周りに水田を開拓し、同じ場所に定住するようになります。水田は、耕地面積が広ければ広いほど豊かな収穫が得られるため、平野の広さが集落の豊かさを物語ります。

有年区域の平野は、千種川流域（全長約68km、流域面積約730km²）のなかで、一、二を争う広い面積を誇ります。この場所に営まれた拠点的な集落遺跡が、東有年・沖田遺跡と有年原・田中遺跡です。

東有年・沖田遺跡は、面積約200,000㎡の巨大集落遺跡で、特に弥生時代から古墳時代にかけて、数多くの竪穴住居跡が発見されています。現在は一部が兵庫県指定史跡となり、歴史公園として公開されています。一方の有年原・田中遺跡は、約70,000㎡と東有年・沖田遺跡よりかなり小さなものの、有年原・田中墳丘墓が見つかっていることや、装飾された壺・器台・高杯、銅鐸形土製品、分銅形土製品、初期須恵器など「特異」な遺物が多く出土します。なお、有年地域にはほかに主要遺跡として、有年牟礼・山田遺跡、西有年・長根遺跡などがあります。

こうした集落は、播磨の他地域に比べて平野が少ない千種川流域にあって、時代を問わず人々の生活の場となり、また拠点とも言える役割を担っていました。

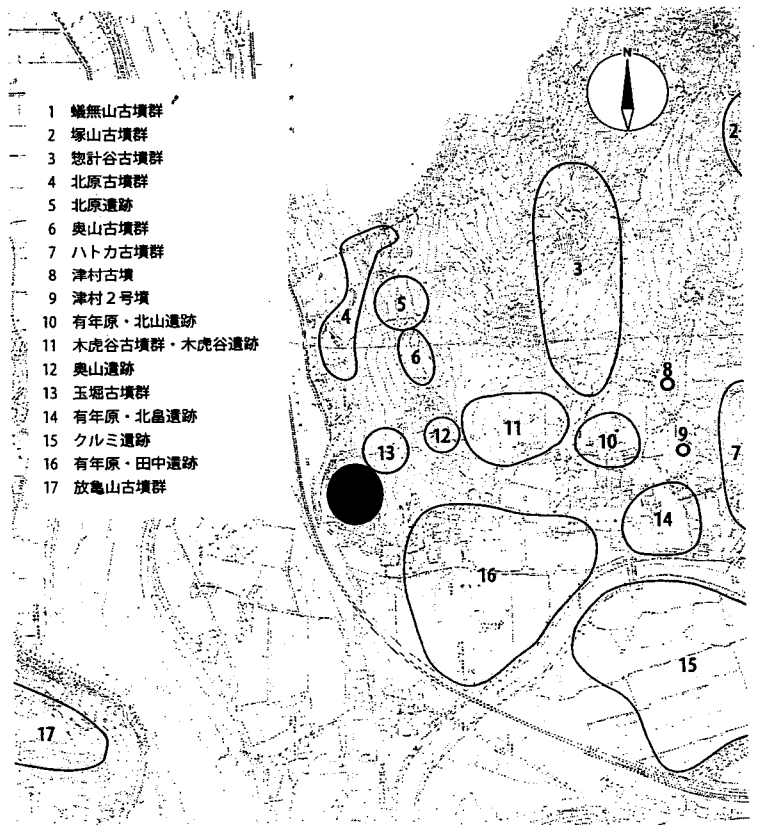
蟻無山1号墳はこうした社会背景のもと築かれた古墳であり、千種川流域では随一の権力を誇った人物が葬られていたと考えられています。



- | | | | | | | | |
|--------------|---------------|--------------|---------------|-------------|----------------|--------------|--------------|
| 1 山田奥窟跡 | 9 津村古墳 | 17 有年原・北畠遺跡 | 25 富原遺跡 | 32 三軒家古墳群 | 40 西有年・道古殿遺跡 | 48 西有年・樂床遺跡 | 56 長根古墳群 |
| 2 荒神山古墳群 | 10 惣計谷古墳群 | 18 奥山遺跡 | 26 野田遺跡・野田古墳群 | 33 香ヶ瀬古墳群 | 41 西有年・堂塚ヶ市遺跡 | 49 西有年・堂免遺跡 | 57 西有年・往來南遺跡 |
| 3 塚山古墳群 | 11 北原遺跡・北原古墳群 | 19 有年原・田中遺跡 | 27 上所二又溝遺跡 | 34 有年山城跡 | 42 与井谷口古墳群 | 50 西有年・玄形遺跡 | 58 西有年・香山遺跡 |
| 4 有年牟礼・山田遺跡 | 12 奥山古墳群 | 20 有年原・クルマ遺跡 | 28 上所山田遺跡 | 35 放龜山古墳群 | 43 西有年・与井谷口遺跡 | 51 西有年・木ノ目遺跡 | 59 清水山寺跡 |
| 5 有年牟礼・宮ノ前遺跡 | 13 玉堀古墳群 | 21 有年牟礼・井田遺跡 | 29 鶴谷山遺跡 | 36 鍋子城跡 | 44 西有年・宮東遺跡 | 52 西有年・畑田遺跡 | |
| 6 奥山田古墳群 | 14 蟻無山古墳群 | 22 高野須城跡 | 30 黒沢山光明寺跡 | 37 下宮生遺跡 | 45 西有年・木ノ目池内遺跡 | 53 西有年・埴内田遺跡 | |
| 7 ハトカ茶畑遺跡 | 15 木虎谷古墳群 | 23 嶺ヶ堂城跡 | 31 中所古墳群 | 38 上宮生遺跡 | 46 北山古墳群 | 54 西有年・北遺跡 | |
| 8 ハトカ古墳群 | 16 有年原・北山遺跡 | 24 医王山旅行寺跡 | | 39 東有年・沖田遺跡 | 47 馬路池遺跡 | 55 西有年・長根遺跡 | |

2 有年原の遺跡

有年区域のなかでも、有年原は特に遺跡の集中する地区です。著名なものとして、有年原・田中遺跡（主に弥生時代から奈良時代の集落遺跡。一部が兵庫県指定史跡）、蟻無山古墳群（古墳時代中期の古墳群。1号墳は兵庫県指定史跡）、木虎谷古墳群（古墳時代後期の古墳群。2号墳は兵庫県指定史跡）などがありますが、それ以外の遺跡についてはまだまだ不明な点が多く、全容がわかっているとは言えません。なおこれらの遺跡背後にある「奥山」一帯には、古墳時代後期の古墳が100基以上集中していると考えられています。有年原・田中遺跡の特殊性だけでなく、これほど古墳の集中している地域は、赤穂市内では他にありません。



- 1 蟻無山古墳群
- 2 塚山古墳群
- 3 惣計谷古墳群
- 4 北原古墳群
- 5 北原遺跡
- 6 奥山古墳群
- 7 ハトカ古墳群
- 8 津村古墳
- 9 津村2号墳
- 10 有年原・北山遺跡
- 11 木虎谷古墳群・木虎谷遺跡
- 12 奥山遺跡
- 13 玉堀古墳群
- 14 有年原・北畠遺跡
- 15 クルミ遺跡
- 16 有年原・田中遺跡
- 17 放龜山古墳群

平野の面積が広くない有年原が、なぜこれほど栄えたのでしょうか。そのヒントは、地形にあります。今も昔も、人々の生活は周辺地域との流通・交通を抜きにしては語れないものです。縄文時代にはすでに、讃岐（現在の香川県）から石器の原材料が日常的に運ばれていたり、弥生時代には河内（現在の大阪府）から土器が運ばれていたことがわかっています。古代から、人々は積極的に交流していたことは間違いありません。

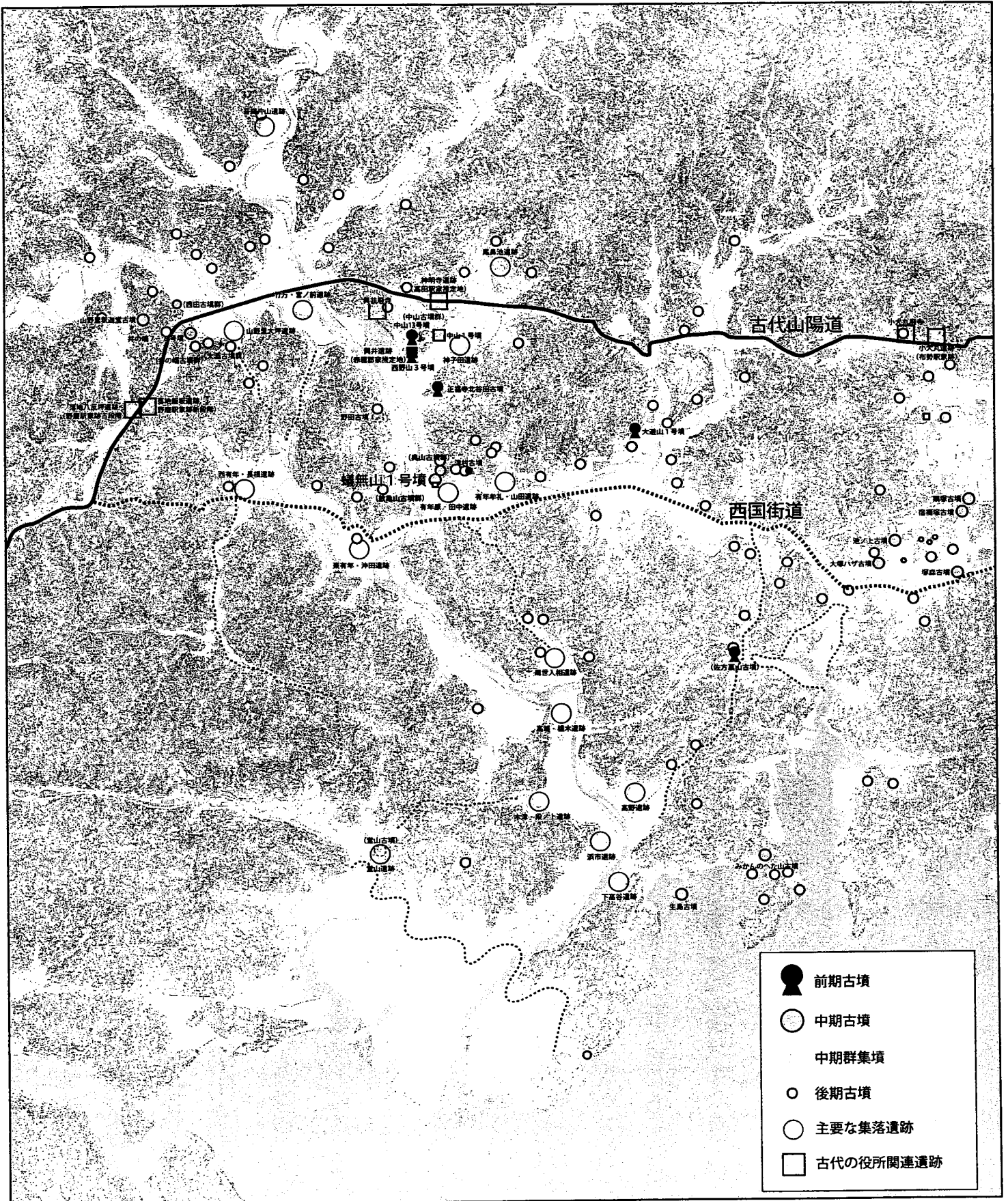
奈良時代になると古代山陽道という昔の高速道路が、たつの市—上郡町—備前市を通るように整備されますが、たつの市、相生市から有年を通り、上郡町もしくは備前市へと抜けるルートも、古来より利用されていたに違いありません。しかも、たつの市室津はもちろん相生市の平野は海から近いため、相生市—有年—上郡町というルートは、古来から海運も含めた流通ルートとして利用され、そのために有年原や有年牟礼が栄えたと考えられるのです。

3 古墳と交通ルート

この証拠となるのが、古墳時代に築かれた古墳の存在です。古墳は、当時の権力者の支配地域を示すものであり、古墳の形や大きさによって、その権力の大きさや内容がわかると言われています。

千種川流域で大規模な前期・中期古墳は、矢野川流域となる相生市域を除くと、中山13号墳（上郡町／古墳時代初頭の前方後円墳／全長57m）、正福寺北谷田古墳（古墳時代前期前半の前方後円墳／全長39m）、西野山3号墳（上郡町／古墳時代前期後葉の前方後方墳／全長32m）、蟻無山1号墳（赤穂市／古墳時代中期前葉の帆立貝形古墳／全長52m）であり、これらは半径わずか1.5kmの範囲に集中して築かれています。しかも、これらは古代山陽道沿いではなく、赤穂市から上郡町へ抜ける千種川沿いに南北に立地していることも、このルートが重要視されていたことを物語っていることでしょう。相生市域を見ても、大避山1号墳（相生市／古墳時代前期初頭の前方後円墳／全長60m）、佐方裏山古墳（相生市／古墳時代前期の前方後円墳／全長33m）といった前方後円墳が、相生湾から有年へと至るルート上にあることを考えれば、さらに納得していただけたと思います。





赤穂市周辺の古墳分布図

4 古墳の形と階層

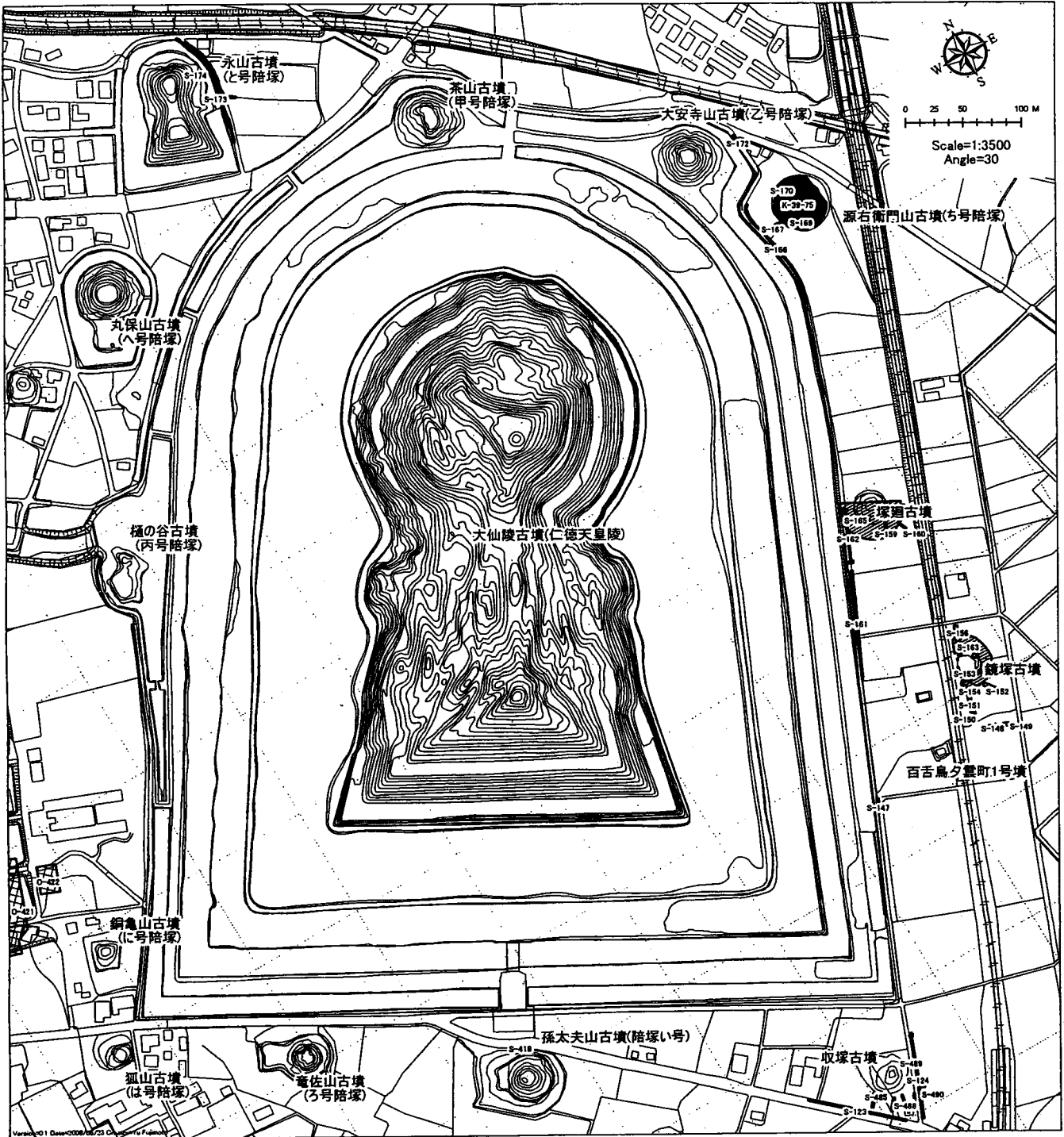
古墳時代にはいろいろな形の古墳が築かれました。このうち、前方後円墳は、特異な形にも関わらず全国各地にたくさん築かれ、特に奈良や大阪に集中して大規模なものが築かれる点で、当時最も権力が大きかった階層の人々の墓と目されています。なかには全長486m（仁徳天皇陵／大仙古墳）と世界最大規模のものもあります。

大阪では、こうした前方後円墳に隣接するように築かれているのが、円墳や方墳、帆立貝形古墳と呼ばれるものです。こうした古墳は、古墳時代中期（5世紀）になって大阪の百舌鳥・古市古墳群に前方後円墳が多数築造されたとき、巨大前方後円墳の周囲に築かれました。前方後円墳の被葬者と深いつながりがある一方で、前方後円墳を築くことが許されなかった階層の人々の墓であると評価されており「陪塚」と呼ばれます。

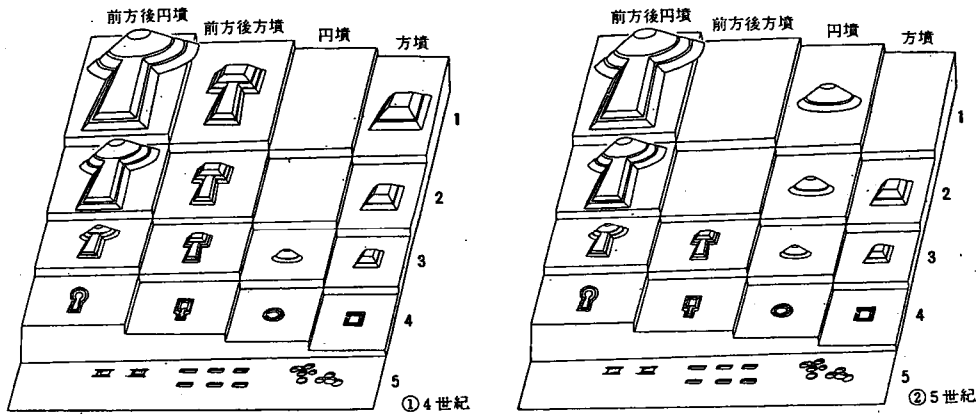
ただし播磨では、5世紀になると姫路市の壇場山古墳（全長147m）の前方後円墳、加西市の玉丘古墳群以外は、前方後円墳がほぼ消失し、円墳もしくは帆立貝形古墳ばかりが築かれるようになります。周辺地域で突如出現するこうした大型古墳については、中央政権からの結びつきが強くなったことを示し、地域内で大きな権力を誇った人物が葬られた、との説が一般的です。このように、古墳の規模と形は、被葬者の生前の階層を示していると考えられています。

なお、播磨におけるこうした直径30～40m規模の円墳には、初期須恵器が伴うものが多く、発掘調査が実施された例では姫路市宮山古墳、加古川市カンス塚古墳など、朝鮮半島由来の遺物が副葬されていることが判明しています。蟻無山1号墳も、こうした古墳の一つであり、千種川流域では随一の権力を誇った人物が葬られていたと考えられています。





仁徳陵古墳（大仙古墳）と周囲の陪塚群



古墳の形と階層秩序

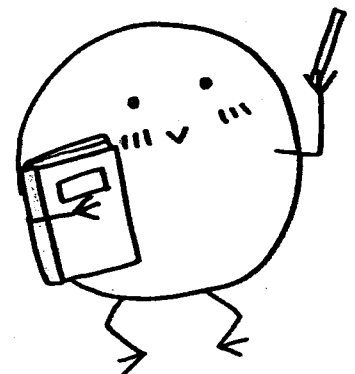
5 蟻無山古墳群

このような社会背景のなか、蟻無山に3基の古墳が築かれます。このうち蟻無山1号墳が古墳時代中期としては千種川流域最大と言える規模であり、現在、兵庫県指定史跡となっています（昭和50年3月18日指定）。兵庫県指定史跡に指定されるということは、兵庫県内の遺跡のなかで価値が高いと認められたということであり、いわばこの古墳は「兵庫県の歴史を語るうえで欠かせない遺跡」と言えます。

この古墳群の存在をはじめて公にしたのは、有年考古館を設立した故・松岡秀夫先生です。松岡秀夫氏は、昭和37年（1962）に全国的な学会誌『考古学研究』に論文を寄稿して蟻無山1号墳の存在を公表し、また採集遺物の実測図を掲載しました。松岡氏はこの論文で、あえて前方後円墳を築かなかったことの重要性を指摘しています。その後、昭和56年（1981）に刊行された『赤穂市史』第1巻で、初めて蟻無山古墳群の測量図が公開されました。これは昭和40年代に測量された成果をまとめたもので、1m間隔の等高線によって、おおまかな形であっても古墳の形がわかったことは、大変な成果だったと言えます。しかしこの成果以降、蟻無山古墳群の新しい調査はほとんど行われてきませんでした。



松岡秀夫1984「考古学からみた赤穂」『赤穂市史』第四巻より



6 播磨の古墳時代—「円墳の時代」—

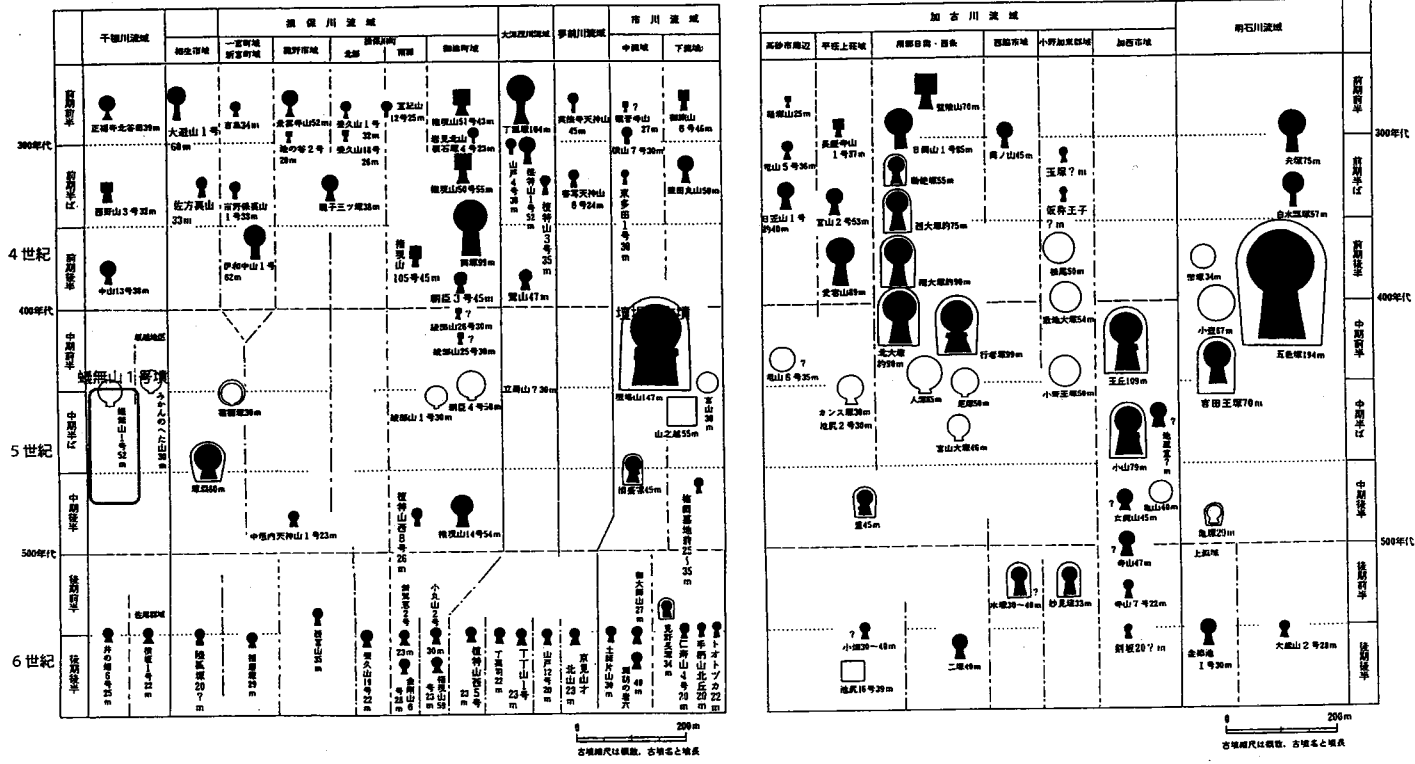
播磨における古墳の変遷は、多くの研究者によって論じられていますが、

- ①古墳時代前期には、各地で前方後円墳が多数築かれる。
- ②古墳時代中期になると、前方後円墳が激減し、代わりに「円墳」や「造出し付き円墳」もしくは「帆立貝形古墳」が多数築かれる。
- ③古墳時代後期になると、再び前方後円墳が多数築かれるが、全長20～30m程度の小さなものばかりになる。

という見解は一致しています。この理由として、中央政権からの許可制度があったとする考えが有力です。

蟻無山1号墳は、このうち②の段階にあり、この現象を代表する古墳なのです。同様の古墳で発掘調査が行われた例には、姫路市宮山古墳や加古川市カンス塚などがあり、こうした古墳からは、朝鮮半島系の品々が副葬されていたことがわかっています。これらは前方後円墳と比べると小さな古墳ですが、特別なものが副葬されているのです。

この現象から、ある研究者は姫路市の壇場山古墳（全長147mの前方後円墳）を頂点として、他地域の円墳に葬られた人々が仕えていた、と論じています。その一方、各古墳が中央政権との直接的な従属関係になった、論じる研究者もいます。



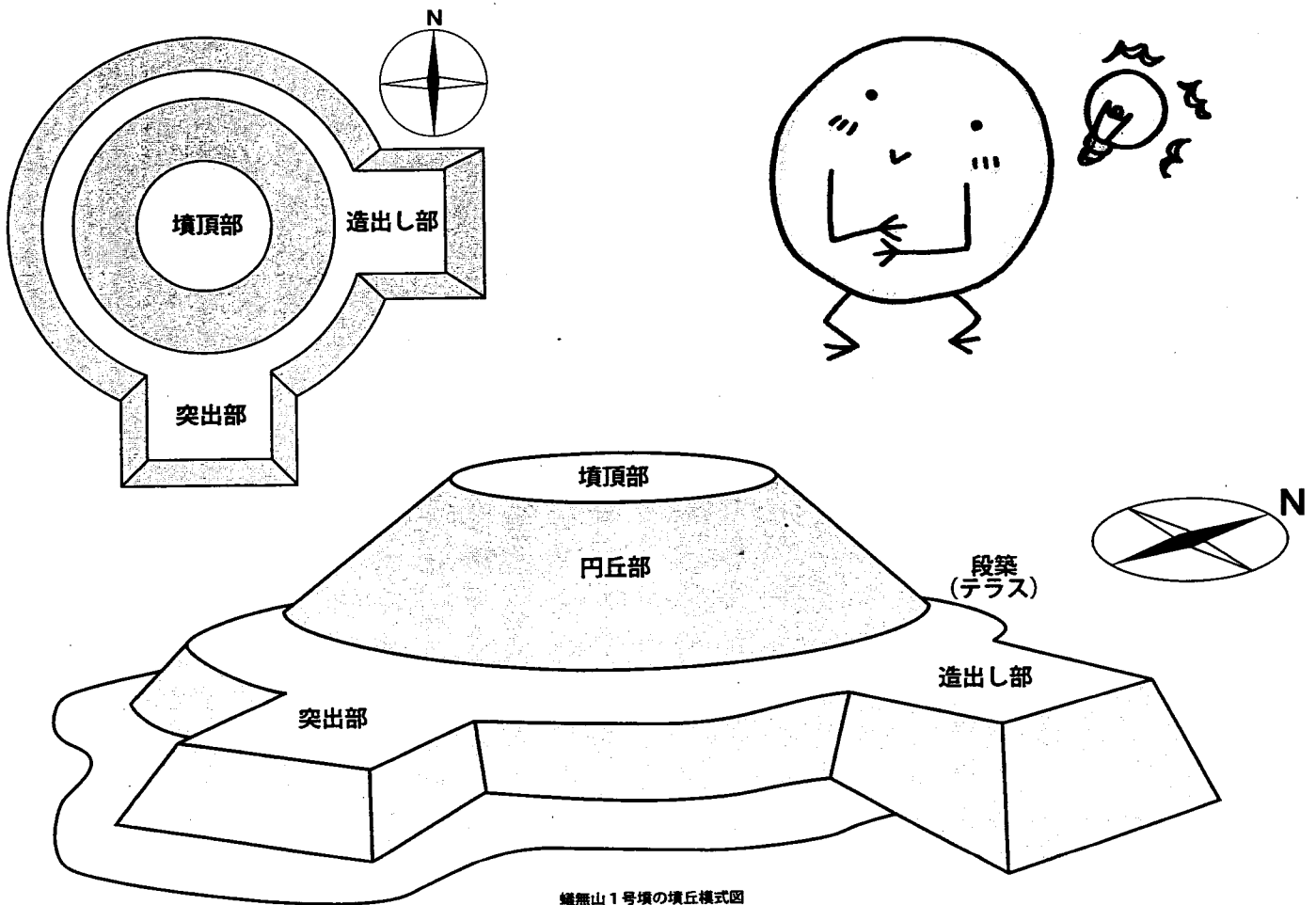
岸本道昭2000「播磨の前方後円墳研究序説～測量調査と集成による基礎作業～」『播磨学紀要』Vol. 6 播磨学研究会より

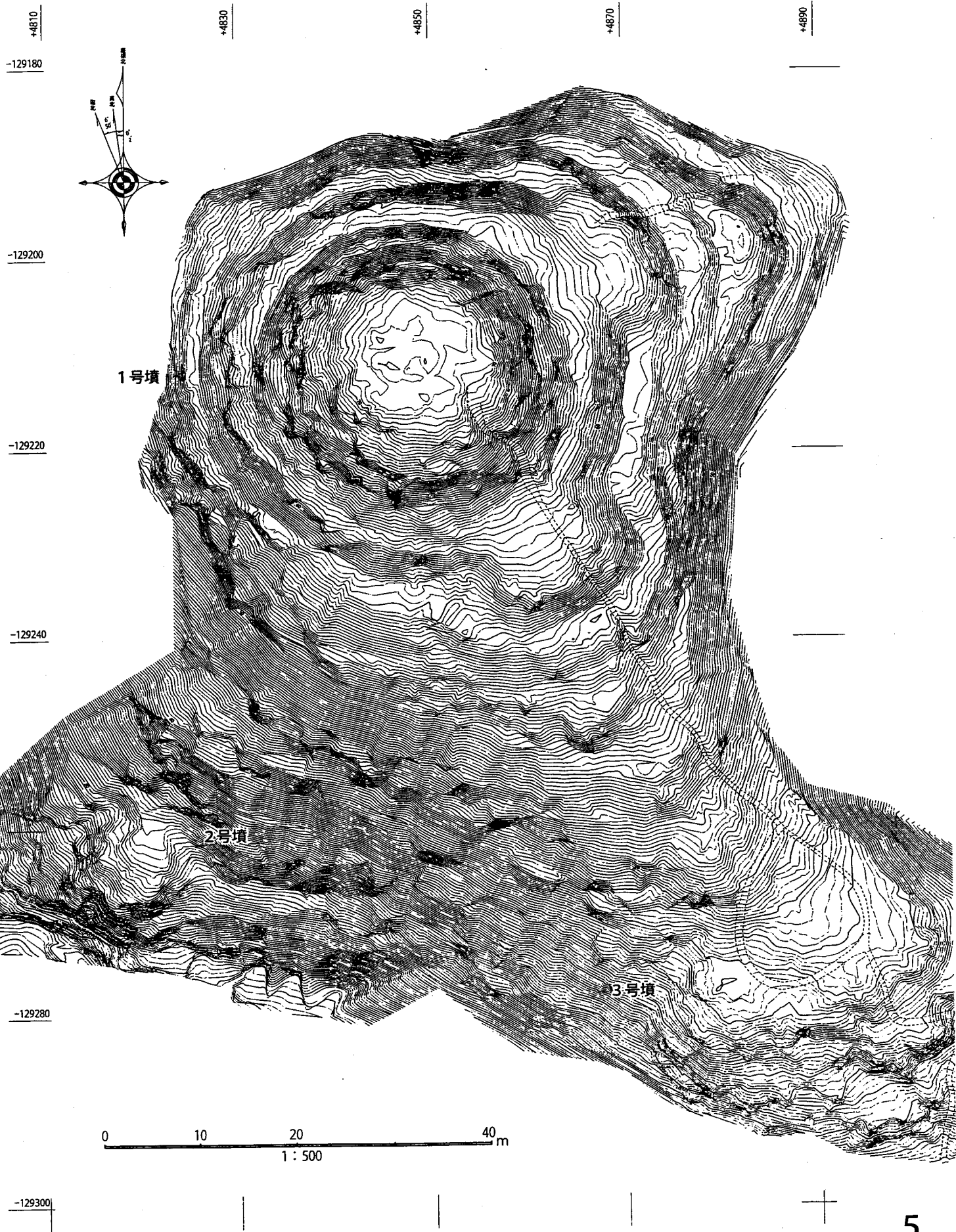
7 蟻無山古墳群の測量調査

蟻無山古墳群は、蟻無山1号墳が兵庫県指定史跡の指定を受けたものの、その後は樹木が繁茂し、蟻無山1号墳の形や規模が不明瞭で、蟻無山2号、3号墳については、本当にあるのかさえわからなくなっていました。さらに登山道の整備によって、古墳の形は一層わからなくなっていました。

しかし平成13年度になって「森林と人との共生」をスローガンとした森林空間総合整備事業の一環として、蟻無山1号墳の墳頂部周辺の間伐が実施されました。この間伐後に赤穂市教育委員会職員が立ち入ったところ、これまで知られていなかった「段築」と呼ばれる形や、葺石が良く残されていることがわかりました。そこで、重要なこの古墳群の形状を把握し、範囲を確定させるため、文化庁の国庫補助事業採択を受けて測量調査を実施しました。

調査の結果、蟻無山1号墳は、全長52mとこれまでの見解とは変わらないものの、「段築」及び「造出し」をもつ、「帆立貝形古墳」であることが判明しました。また、蟻無山2、3号墳も確認され、その位置と現状を把握することができました。





蟻無山古墳群のデータ

蟻無山1号墳

標高58mの蟻無山山頂に立地

造出し付きの帆立貝形古墳

葺石・二段築成

全長52m、円丘部径44m、円丘部頂径16m、円丘部高12m

突出部長8m、突出部幅18m、突出部高3m

造出し部長10m、造出し部幅12m、造出し部高3m

※中期古墳としては千種川流域最大。

発掘調査記録無し



蟻無山2号墳

直径約10m、高さ6mの円墳

出土遺物として初期須恵器3点（はそう1点、壺2点）、鉄刀が知られている。

蟻無山3号墳

直径約7m、高さ2mの円墳

発掘調査記録無し

登山道により一部破壊されている



蟻無山古墳群採集遺物（一部を除いて有年考古館所蔵）

初期須恵器（器台2個体、甕1個体）

円筒埴輪、朝顔形埴輪

形象埴輪

馬、盾、蓋、家、鳥、船、鞍形埴輪

※うち、鳥、船、鞍は今回の整理調査により新発見

※馬形埴輪は全国でも最古段階の資料（製作技法から）

※船形埴輪は、全国で50例程度しか見つかっていない

スイジガイの文様が施されたものは例がない（文様が施される例が少ない）

（奈良県仲津山古墳（仲津媛陵。全長290mの前方後円墳、陵墓参考地）の盾形埴輪、

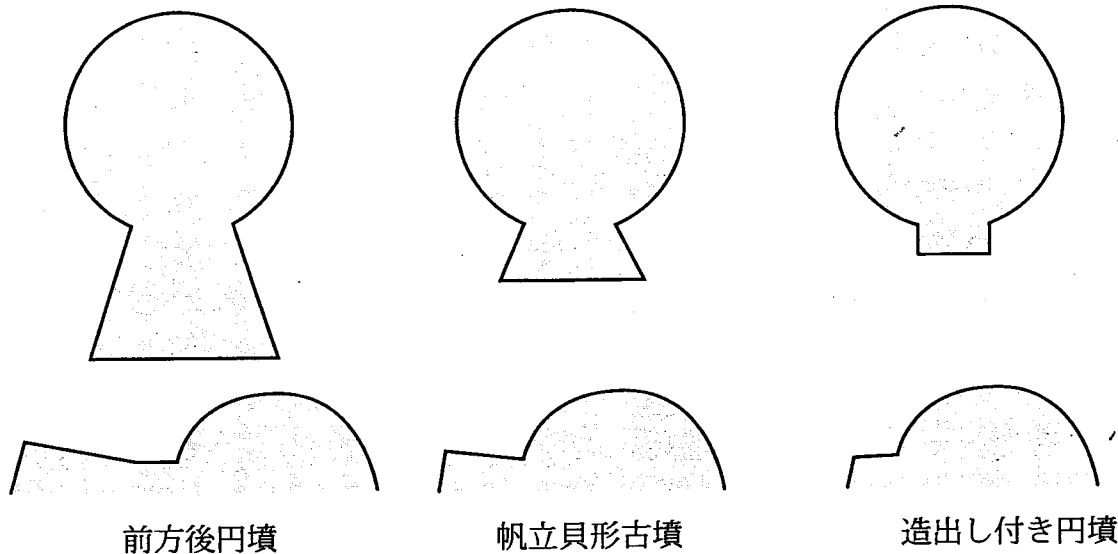
大分県亀塚古墳（全長116mの前方後円墳、国史跡）の円筒・朝顔形埴輪、

岡山県金蔵山古墳（全長165mの前方後円墳）の盾形埴輪に類例）

※人物埴輪はまだ出現しない時期

蟻無山1号墳が造出し付きの帆立貝形古墳と判明したことについて

これまで、蟻無山1号墳は全長52mの帆立貝形古墳として知られてはいましたが、帆立貝形古墳は前方後円墳との違いが曖昧で、また「造出し付き円墳」との違いも曖昧でした。



しかし今回の事例は、形の異なる突出部が2つ付けられていたことから、突出部と造出し部であると評価することができ、従来「帆立貝形古墳」もしくは「造出し付き円墳」の可能性が指摘されていたうち、造出し付き円墳の可能性は無くなったこととなります。帆立貝形古墳が前方後円墳の一つであるとの評価もありますが、本来の意味での前方後円墳とは大きく形が異なるため、今回の調査では帆立貝形古墳としました。

8 まとめ

これまで説明してきましたように、古墳時代中期になると、播磨では多数築かれていた前方後円墳がほとんど無くなり、円墳を中心とした古墳ばかりとなります。そのなかで、帆立貝形古墳は、それぞれの地域の最大権力者が葬られたものであることは間違いなく、播磨の歴史を語るうえで欠かせない遺跡と言えます。

発掘調査が実施されたこうした古墳からは、朝鮮半島由来の遺物が多く出土していることから、中央政権より特別な地位を許され、こうした古墳を築くことができたのかもしれませんが。

しかし、詳細な測量調査で確実な帆立貝形古墳として認定された古墳は意外と少なく、今回の調査により詳細な形状が把握され、突出部と造出しを備える珍しい形と判明したことは、いまだその理由が解明できていませんが、大変重要な成果となりました。また採集された遺物は、初期須恵器をはじめ、スイズガイの文様が施された船形埴輪や初期の馬形埴輪など、これもまた珍しいものです。

播磨の歴史を語るうえで欠かせないこの古墳は、その特異な形状と出土遺物も含め、今後の考古学研究の基礎資料として利用されることになるでしょう。